祭りのあとの東京で

彼女の家に向かう商店街には輸入食品店から中古レコード屋まで新旧の店が連なり、どこか昭和の面影が残っていた。

「都心の方がいろんな店が残ってるんだよね。意外に郊外の方が全部綺麗になっちゃう」

ミュージシャンでタイ料理研究家のMUさんが住むマンションもレトロな外観だが、竣工年は一九八〇年とそこまで古くない。ジュリーの「TOKIO」が流行ったあの頃、子ども心に世の中が一気に都会化された気がしていたが、実際の東京はまだまだ垢抜けていなかった。

このマンションにもそんな野暮ったい東京がオシャレをおぼえて背伸びしていた時代の残り香が漂っていた。とはいえ彼女が移り住んだのはずっと後年で、東京はすでに祭りのあとだった。

「二〇〇九年、リーマンショックの頃です。あまり良くないときに来ましたね。日本に帰ってきた日に最初に見たニュースが秋葉原事件で、これから東京に住もうと思ってたのに、こんなとこなの!? って不安になりましたよ」

彼女はそれまで、サンフランシスコやバンコクなど、海外で一二年も暮らしていた。バンコクでは、イギリス人やタイ人と無国籍のロックバンドを結成し、日本盤CDも発売され、世界中をツアーをするなど活躍していたが、二〇〇九年に解散し帰国したのだ。

「日本で社会人をやったことがなかったので、体験してみたいと思って」

東京に来てからもソロ名義で音楽活動を継続し、大物シンガーの楽曲制作にも携わった。内田裕也主催のニューイヤーロックフェスやFuji Rock Festivalに出演するなど活躍していたが、

「でもその頃、東日本大震災があって、東京にいるのが辛くなっちゃった。音楽活動もいったんやめて、どう生きていけばいいか路頭に迷っていました。だから一年ぐらい故郷に帰ったんです」

地元では大手メーカーの工場で、翻訳業務を手がけていたという。

「企業カラーの青色の制服を着て、胸のリボンに名前をつけて作業服のおじさんたちに混じって仕事してました（笑）」

フェスで歌うロックミュージシャンから、メーカーの出向社員までの距離は遠い。どんな場所でも適応できてしまう身軽さには脱帽する。

「でもまた頑張ろうと思って東京に戻ってきたんです」

原点は家での一人遊び

直近では、シェアハウスとマンションを経て、この家には四年間住んでいる。

「前の二軒はどちらも取り壊しで追い出されました。本当に流浪の民ですね。家の決め手は、とにかく家賃が安いこと。あとやっぱり音が心配だから鉄筋コンクリートは必須です。そうなるともう地域の中で、一、二軒しか物件がない」

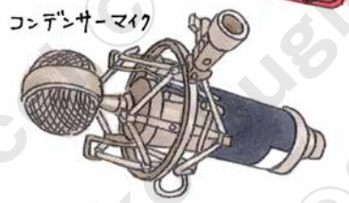
聞けば確かに賃料はこの地域にしては驚くほど安価だが、住み心地は良さそうだ。狭めだけれど窮屈には感じないし、カーテンもほとんど開けないほどのインドアライフなので陽当たりも気にしない。むしろコンパクトな分だけ無駄がなく、広めの家より住民の個性が色濃く反映されている感じがした。

まず目に飛び込んできたのは、ベランダの窓を塞ぐように置かれたKORGの白い電子ピアノだ。エレガントな佇まいはMさんの分身のよう。パンキッシュな曲とファッションで観客を魅了してきた彼女だが、不思議と何をやっても品がある。最近は日常の切り取り方が機知に富んだ、落ち着いた雰囲気の曲も多くつくっている。

「でも電子ピアノは音を録るときだけ。作曲には、パソコンに信号を送って音が出せるMIDIキーボードを使っています。省スペースでもいろいろできるようになってきたから、最近は電子ピアノを弾くことはほとんどないですね」

棚には変わった形のマイクがあった。

「それはコンデンサーマイク。ステージで使うダイナミックマイクは声しか入らないけど、これは歌ってるときの息づかいとか、キメ細かい音も録れる。家で録音するときに使ってます」

こんな小さな部屋でもアルバム制作ができるのかと驚いた。宅録はタイでバンドを結成する以前、サンフランシスコで美大に通っていた頃からハマっていたそうだ。

「最初はテープ。次はZipディスクで録音してました。こんなことやってて何になるのかな？ って思ってたけど、友だちにデモテープを聞いてもらったら、〝一緒にやろう〟って誘ってくれて、バンドを結成したんです。バンマスがパソコンでトラッキングするソフトの使い方を教えてくれて〝あ、早い！〟って（笑）」